

道徳と教育

特集 「主体的・対話的で深い学び」をどう実現するか

2019年
日本道徳教育学会

Moral
and
Education

2019
Japan Moral Education Society

平成31年3月31日 第63巻
昭和51年9月30日学術刊行物指定

衛藤吉則 著

『西晋一郎の思想—広島から「平和・和解」を問う—』

小池孝範

(秋田大学)

西晋一郎は1873（明治6）年、鳥取県に生まれ、広島高等師範学校、広島文理科大学教授等を務め、1943（昭和18）年、70歳で逝去している。評者は、西氏の思想についてこれまでふれたことがなかった。一つには評者の視野の狭さがあるが、それ以外にも西が教学刷新評議会委員、神祇院参与等の国家の要職を務め、「わが国の国体論形成に大きくかかわって」いたこと、それゆえ、その思想も「国家主義的イデオロギー」の側に位置づけられ、思想そのものが〈封印〉されたことがあげられるだろう。

本書は、こうした^{くび}軛から西の思想を解放するとともに、「意識を核とする西の主体変容論」がもつ「共生理論」の可能性と有効性から「平和・和解」概念を構築することが目指されている[9]。このことを検討している第1部は、序論と結論を含め六つの章からなり、序論では、先にあげた本書の目的が現在の社会的状況をふまえて示される。以下、本書の内容を概観してみたい。

1.では、西が東洋思想へと着目していくプロセスをたどった上で、こうしたプロセスを経て、近代西洋哲学の欠陥を克服する新たなパラダイムの獲得を、「日本思想の蓄積のうちに」見いだそうとしていったことが示されている。

2.では、西思想の眼目が「特殊即普遍」の思想にあり、そこから展開される「特殊即普遍のパラダイム」について、「実在の構造」と「主体変容のプロセス」の視点から体系的解説が試みられている。「実在の構造」については、「特殊即普遍」の論理的根拠について、西洋思想を

ふまえつつ明らかにした上で、「実在の構造理解」が、動的性格をもった「特殊即普遍」「一即多」の構造として描き出されている。こうした構造は、「内観的な総合知」によって看取されるものであり、それゆえ、西において「実在の構造」は「意識の問題」としてとらえられることになり、さらに、他を知ることは、自己変容と相即の関係にあることが示される。そこで、次に「主体変容のプロセス」が検討される。ここでは、「自己意識」、老子おける「虚」の思想、「自由」、「感情と意志」、「意識と道徳」等をキーワードとして変容のプロセスが分析され、西において「垂直軸的な変容理論」として展開されると整理される。

3.では、西思想の現代的意義が検討され、その哲学上の意義が「伝統的哲学における自由論の二面を統一したこと」にあることを示す[59]。具体的には、西が超克を旨とした「価値相対主義」の弊害が西の思想に即して検証され、「内観的な反省」の重要性が示される。その上で、西思想のもつ「内観的・垂直的思考」の現代的意義が、「ポストモダン」的意義をもつことと、「現代的ホリズム」の構図が含まれていることにあることが提示される。

4.では、ラッセルの「所有衝動」と「創造衝動」の概念を導きとして「ナショナリズム」を定義し、それに基づいて「西理論とナショナリズムとの関係」が検討されていく。西の思想は「絶対的創造としての自由」に依拠した理論であり、「国民的文化の相互連貫としてののみ普汎的文化が実

現される」ことを示している点において、偏狭な「ナショナリズム」とは相容れないものであることが示される。

最後の「結論」では、西思想に基づく「平和・和解」理論の可能性が検討され、「西の思想は…中略…国家主義的イデオロギーの宣揚を理由に〈封印〉されたりするようなものではなく、「同質化」「異質な者の排除」「全体化」とは相容れない、「特殊が特殊なまま多様性を保ちつつ変容し、普遍と即応する程度に応じて各々の具体的な普遍を実現する」というプロティノスのな〈特殊即普遍のパラダイム〉を理論の根底にもつものといえる」[85]と結論する。

以上、本書の内容の概略を駆け足でたどって見たが、著者の該博な知識に基づいた西洋思想からの影響と西洋思想との対峙を軸として、西思想の特徴と意義が精緻に描き出されていた。そこからは、西思想のもつ思想的深さと、西が西洋の哲学、倫理学の諸問題にいかに対峙してきたかをうかがうことができる。ただし、西の、また筆者の思想的背景の広さゆえか、評者には理解が難しいところがあった。そこで、評者は、大きく二つの補助線を引きながら本書を読み進めた。一つは時代背景を含めた西田幾多郎の思想との関連、もう一つは仏教思想である。同時に、この二つを通してみると、疑問点（であると同時に今後の可能性）が浮かび上がってきた。

まず、ほぼ同じ時代を生きた西田幾多郎(1870-1945)との関係である。近代西洋哲学のもつ欠陥を克服する新たなパラダイムの獲得を「日本思想の蓄積」のうちに見いだそうとする西の問題意識は[22]、西田とも共有していたといえるだろう。このことについては、註36.において西田や鈴木大拙との関連が概略的に示されている[91]。ただし、こうした基本的枠組みのみならず、(自然)科学的態度へ対峙しようとする視点(例えば[38])や「自覚」を重視する立場にも西田との問題意識の共通点

を見いだし得るし、西、西田のみならず、日本における当時の知識人共通の問題意識であったともいえるだろう。

同時にこのことは、西の思想が戦後、「国家主義的イデオロギー」の側に位置づけられることになった遠因となっていたかもしれない。西田の思想も戦後、「述語的論理」等が「個や主体性の軽視」とみなされ、批判されることとなった。西の場合、様々な国家の要職を務め、「わが国の国体論形成」に大きくかかわったとの批判から思想的な検討なしに〈封印〉されることとなったが、「特殊即普遍」のパラダイム自体も、今一度、時代的背景を含めて思想的に検証される必要があるように感じられた。

2点目は、筆者が西思想の中心概念に据える「特殊即普遍」は仏教思想、特に「一即多・多即一」、「一即一切・一切即一」を説く『華嚴経』や、「即」なる対応関係を理論の核に置いていることなどは中国仏教からの影響を感じさせるものである。本書の中でも、西が少なからず仏教の影響を受けていることにふれられているし[22]、鈴木大拙の「即非の論理」に依拠した理解も示されてはいる[31]。しかし、今一步ふみ込んで、仏教を通して西思想を理解することも必要だったのではなかっただろうか。

さらに、仏教の立場から見た場合、西の展開する「特殊即普遍」のパラダイム自体が、ナショナリズムとの親和性をもって受容された可能性もある。むろん、西の思想を丹念に辿れば、「理論上、排他的闘争的な要素を見いだすことはできない」だろう[81]。しかし、「特殊即普遍」と語る際、その本来の意図とは別に、「特殊(個)」が「普遍(類・国家)」に解消されてしまうと解釈される危険性はなかっただろうか。仏教の諸経典においては、「一即多・多即一」、「色即是空・空即是色」等として、「即」を媒介として結びつく二つが、反転して対になって用いられている。西の思想が「特殊即普遍」のみ

ならず、「普遍即特殊」の視点を含んで再構成された時、「国家主義的イデオロギー」の軛から本格的に解放されるのではないだろうか。

以上、管見から本書について所感を述べたが、西のおかれていた状況から、思想的な検討なしに思想そのものが〈封印〉されていた西思想をその「軛」から解放し、思想的な批判の俎上に載せたことは、今後の西思想の検討にあたって、特に道徳の教科化をめぐる議論の中で大きな役割を果たすものとなることが期待される。

なお、第2部には、広島大学に所蔵されている「1.西文庫目録」、「2.著作・講義・講演の分類」、追想録や研究書、研究論文等の「3.関連文献」、縄田二郎氏から寄贈された西関連書籍が示された「4.縄田二郎氏寄贈図書類」、「5.西晋一郎略年譜」が収められており、西のあゆみをたどることができる。

(広島大学出版会 2018年1月発行 207頁)

平成31年3月31日 発行

編集 日本道德教育学会

発行人代表 押谷由夫

発行所 日本道德教育学会事務局
〒184-8501
東京都小金井市貫井北町4-1-1
東京学芸大学永田研究室内
Tel/Fax : 042-329-7881
E-mail : nagata@u-gakugei.ac.jp
<http://doutoku-gakkai.sakura.ne.jp>
郵便振替 00170-9-48122

印刷所 サン企画
〒202-0023
東京都西東京市新町6-2-6-606
Tel : 042-277-9981

※学会誌の刊行にあたっては、公益財団法人上廣倫理財団からの助成を受けています。
※学会事務局へのお問い合わせ等は、なるべくメール等をお願いいたします。